

5

教育活動としての馬の活用

—事例—

■教育課程に位置づけて行っている活動例

長野県木曾養護学校の事例

産業現場等における実習(職業教育)で、自分以外の存在のために働く喜びを実感します！

一日の流れ(平成15年度の例)

- 7:55 木曾福島駅発の路線バスに乗車
- 8:34 木曾馬の里入り口バス停で下車
- 8:55 徒歩で木曾馬の里へ到着
- 9:00 厩舎の仕事(全員で)〈ポロとり・おが粉撒き・えさ入れ・通路の掃き掃除など〉
- 10:00 休憩
- 10:15 厩舎の仕事・昼食作り
- 12:00 昼食

- 13:00 片づけ・木曾馬に直接かかわる仕事
〈片づけ・ブラッシング・装鞍・引き馬・乗馬〉
- 13:55 仕事終了
- 14:00 木曾馬の里発[スクールバス利用]
- 14:30 学校着【日によって昼食の材料購入】
休憩
- 14:45 仕事の反省記入・翌日の計画確認
- 15:45 下校

実施時期(5月末から6月上旬) 期間(10日間)



おがご撒き



ホースのかたづけ



ぼろ取り



通路掃除



えさの量をはかりで確認



屋内馬場の水まき



ブラッシング



昼食準備

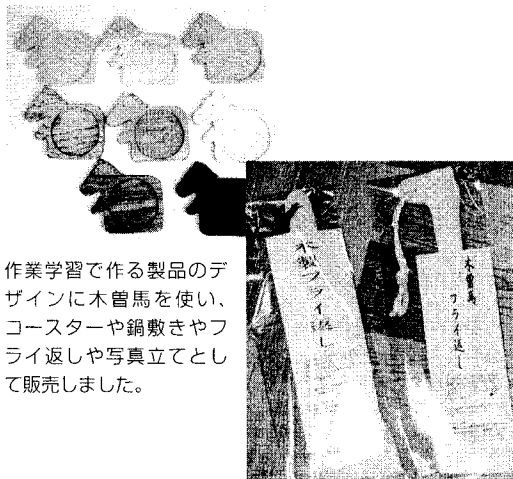


引き馬

ここがポイント!

- 学校以外の場所で、プロの仕事のすこさを生徒に感じてもらえるように、木曾馬の里の方の仕事をよく見て手伝わせていただくことから始める。
- 木曾馬へのよい接し方、道具の正しい使い方を徹底して安全に取り組みできるようにする。
- 昼食準備で調理実習を行う時には、手洗い等を中心に特に衛生面に気を配る。
- 教師は、できるだけ指示を出さずに一緒に働き、仕事のコツをつかんだり、生徒のできる姿を見つけたり、生徒と木曾馬の里の方や木曾馬とのかわりが深まるような支援を探ったりする。
- 生徒が自分で気づいていない仕事に取り組む良い姿や木曾馬の里の方や友達や観光客との良いかわり方を、生徒自身や学級全体や保護者に伝える。
- 秤や入れ物を使って餌やおが粉の量を生徒が自分で正確に判断できるようにしたり、一日の仕事の流れを同じにしたりして、生徒の自己決定の場を増やしたり、仕事の効率化を図ったりする。
- 木曾馬と一緒に働く人達が喜ぶ姿を目の当たりにして働く意欲が高まるような展開を工夫する。
- 路線バスの利用、昼食材料の買い物等、社会生活の経験が広がるような活動内容を組み込む。

産業現場等における実習の体験を活かして



作業学習で作る製品のデザインに木曾馬を使い、コースターや鍋敷きやフライ返しや写真立てとして販売しました。



学校祭や学習発表会に向けての生活単元学習では、木曾馬乗馬体験コーナーの企画・運営をしたり、木曾馬を題材にした劇を共同で創って発表したりしました。

5 教育活動としての馬の活用

—事例—

定期的な学習(自立活動)で、特に心理的な安定・身体の動き・コミュニケーションの力が高まります！

回数・日程・参加者・内容について

- 4月下旬～7月上旬・9月～11月上旬・週1回・曜日を決めて実施(1シーズン15回程度)
- スクールバスを利用(午前…9時半出発→12時帰校・午後…12時45分出発→14時半帰校)
- 参加者…年間5人～7人程度(一人の学習時間を充分確保するためにはこれくらいの人数が限界)

学習の基本的な流れ

■事前に牧場の方とよく相談して、その子にあった内容で行いましょう。

①前日の帰りの会等で予告→②朝の会等で予定確認→③スクールバスで移動→④乗る順番を決め、馬の様子を見たり、乗馬の準備をししたりする(ブラッシング・馬装・引き馬等)→⑤馬に挨拶をして乗る→

⑥学習の流れを聞く→⑦出発の合図をする→⑧ゆっくり引き馬をしてもらって乗る→⑨願いにそった学習をする(手前を変える・必要に応じて色々な合図を出す・グリップから手を離す・姿勢を変える・引き馬の速度を変える・手綱をもって一人で乗る練習をする等)→⑩ゆっくり引き馬をしてもらって1～2周乗る→⑪止まった馬の背中にしばらく乗っている(馬の背中で仰向けに寝る・感想を話す等)→⑫馬を降りて馬にお礼の挨拶をする→⑬全員が乗り終わるのを待つ(休憩・散策等)→⑭馬装を解く手伝いをしたり、エサをあげたりする→⑮スクールバスで移動→⑯帰りの会等で学習を振り返る(行動・発言・日記・絵・家庭からの連絡等から、次時の願いを決め出す)



4 馬に話しかけたりエサをあげたりして順番をまつ



軽乗鞍をつけて準備する



5 支援を受けて自分で乗る

ワンポイントアドバイス

子どもが自分でがんばって乗ったと感ぜられるように支援をし、乗ったことを実感できるように十分な時間を取りましょう。



7 こぶしをあげて出発の合図をする

ワンポイントアドバイス

その子の出発の合図が出るのを待って、馬を歩かせましょう。「あー」と言いつ、腰を前後に動かす・引き手を見る等も合図になります。



8 ゆっくり乗る

ワンポイント
アドバイス

少なくとも200Mくらいは、子どもが馬に乗っているために必要な最低限の支援だけをし、話しかけないようにしましょう。
上がっていた肩が下がったり、腕や足の力が抜けたりしてリラックスできるまで続けましょう。場合によっては、ここが願いの学習になります。



10 仰向けに寝る



12 お礼をする



9 手を離して乗る

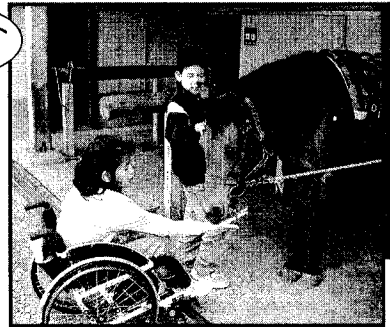
ワンポイント
アドバイス

技に挑戦する！と言って意欲的に取り組む姿が見られます。その子の願いにそいつつ、保護者や教師のねらいも達成できるように内容や方法を考える必要があります。



ワンポイント
アドバイス

馬に乗っている時間は15分から20分を目安にしましょう。状況にあわせて、最適な学習を行いましょ。



14 エサをあげる



通路掃除

(安川千壽子)

福島県立あぶくま養護学校の事例

学校の中での乗馬体験の取り組み

乗馬との出会い

本校での乗馬の始まりは平成14年からで、まだ、始まったばかりです。福島県内で障害を持つ子ども達が乗馬に取り組む活動を行っていることを知った当時の校長先生が滝坂先生(国立特殊教育総合研究所)、高橋公正さん(芝山カントリー牧場)にお願いし、協力を得られたことが始まりです。

幸いにも、高橋さんの牧場は本校から1時間弱の場所にあり、良く調教された馬がいたことで馬とのふれあいや乗馬の機会が得られました。



放牧地の馬たち

乗馬体験の教育課程上の位置づけ

本校は知的障害養護学校なので、運動に重い障害のあるお子さんはおりませんが、最近は自閉症や自閉的な傾向があるというお子さんが増えてきています。

平成16年度は、小学部1年生と6年生の計21名が

乗馬をしました。教育課程の位置づけは、心理的な安定を期待するお子さんについては自立活動、経験の拡大や心身の鍛錬などを期待するお子さんは生活単元学習として実施しています。

乗馬体験の実際

子供たちの様子

最初は馬に慣れるところからはじめています。

写真のお子さんは何度か馬に乗った経験があるので余裕の表情を見せています。



たくさんのスタッフの皆さんの協力のおかげで、友達と一緒に乗馬ができました。

友達も乗っている様子が見られるということが、他の子の乗馬への不安を取り除いているように思います。

大変用心深い性格のお子さんですが、みんなの様子を見たこともあってか自分から「馬に乗りたい。」と、馬に乗ることができました。

この堂々とした自発的な姿から喜びが大きかったのではないかと感じるとともに、これからの自信につな



がっていくと思いました。

今年の乗馬体験は2日間行いましたが、梅雨時に行ったこともあって、二日目はあいにくの雨になってしまいました。

折角の機会なので、スクールバス乗降用の場所で馬にふれたり乗馬を体験させていただきました。しかし、車寄せなので屋根があり下も舗装ということで、ひづめの音が響いてしまい馬達が驚いたようです。また、限られたスペースで屋根による閉塞感もあり十分な乗馬体験にはなりませんでしたが、スタッフの皆さんには行き届いたサポートをしていただき本当に感謝いたしました。そして、がんばってくれた馬達に感謝です。



乗馬時の配慮点



- ①これまでの乗馬の経験、アレルギーの有無、保護者の希望等を確実に集約すること
- ②お子さんの気持ちを大切に、乗りたいと感じ行動を起こすまで待つこと
- ③経験豊かな多くのスタッフと素晴らしい馬達がいること
- ④子どもの様子を良く知っている人がいること
- ⑤馬場の環境が整っていること

学校で乗馬を取り入れ継続させるためには



上記の乗馬時の配慮点を生かしていくこととともに、乗馬の持つ意義、乗馬の活動内容をきちんと整理し、一人一人のお子さんのニーズに応じて教育課程に位置づけるシステムを作ることにあると思います。また、本校においてもこの点は十分ではなく、領域、教科のどこに位置づけることが適切なのかについて、教員の間で検討をしていかなければならないと考えています。

最大の課題は協力していただくスタッフの皆さんの負担が大きいことにあります。現時点では、皆様のご好意によって学校に来ていただき、乗馬を経験させてもらっています。しかし、長く乗馬の経験を積み重ねるためには、来ていただいたり私達が出向いたりして経験できるような場所及び予算面から環境を整備していく必要があると思います。

(梅津幸男)

石川県立錦城養護学校の事例

生徒自身が活動を選択して主体的に取り組む姿を願い、その姿に寄り添うことを指導の原点と考えています。活動で見られた様子と本校独自の評価基準KHscaleで評価し、馬の学習を通して、どのような変容があったのかをみつめます。

1日の流れ 平成16年度の活動例		
時間	活動名称	活動の内容
9:00	集 合	体調確認 朝のあいさつ 学校発
10:00	移 動	石川県馬事公苑着 集合・あいさつ
10:15	乗 馬 準 備 乗 馬	支援を要する生徒
		能力的に高い生徒
		<ul style="list-style-type: none"> 馬装を見る。 興味があり、教師の支援があればできそうな活動に取り組む。 乗馬体験を中心に行う生徒 (資料1参照)
	飼 い 付 け	11:15分頃に昼のエサを与える
11:30	・昼食	・クラブハウスで昼食・休憩
12:50	・個別の厩舎作業	・厩舎作業を行いたい生徒は先生と一緒に。 ・周辺の散策や自由時間
13:00		午前と同じ活動を行う
14:30	午後の活動終了	
15:00	移 動	・石川県馬事公苑発
16:00		・学校着 ・体調確認・解散 *記録対象生徒の担当は研究会



教育課程上の分類



■総合的な学習の時間

■単元名「馬の学習」

場面ごとの活動



事前学習

■馬ってなんだろう

事前学習では、鞍や蹄鉄などの具体物の他に、現地を撮影したビデオを放映して、馬のいる場所で活動が行われることを知らせます。その他にも「いななき」を聞いたり、馬体の一部写真をパズルのように組み合わせたりして、興味や関心がわくよう促します。

■生徒の思いに寄り添う

事前学習が終了し、学習が開始されるまでの期間、生徒たちはそれぞれが、期待に胸ふくらませながらも不安な気持ちもあるようです。この様子から生徒の内面では、さまざまな葛藤を繰り返しながら、当日を迎えている様子を知ることができます。この場面で重要なのは、自らの心に投じた石が生みだす波紋を、自分自身が知ることにより、教師はその波紋を崩さぬように寄り添い、認めることが次の主体的な活動を育てていきます。

■事前学習では、生徒の目線に立ち、どうすれば馬と仲良くなれるのかを共に考えます。

- 日時や場所、持ち物などを知らせる。
- 馬の扱い方や、事故が予測される活動については具体的に説明をする。

- 人参の持ち方や、与え方を知る。
- ウマとヒトの身体の違いや、構造の違いを知る。
- 馬にも顔や性格の違いがあることを知る。
- 自分のペースで馬に近づけば良いことを知る。
- 生徒が馬に対して、どのくらいの関わりがあったか保護者にアンケートをとったり、本人の希望を聞いたりしながら、一人一人の実態を把握した上で展開を組み立てる。

移動の時間

■馬に会いに行こう！

活動を行う石川県馬事公苑までは、本校から約60Km離れています。高速道路を使用しても約1時間近い移動となるのですが、この時間を利用して生徒の体調確認をしたり、活動を知らせたりする時間として利用しています。

帰りの車内は、心地良い疲れに目を閉じる生徒や、互いの活動についての感想を述べたり、先生達からのアドバイスなどを聞いたりする時間にしています。



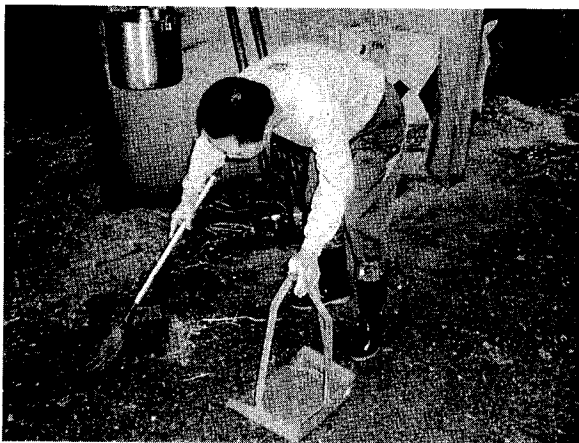
5 教育活動としての馬の活用

—事例—

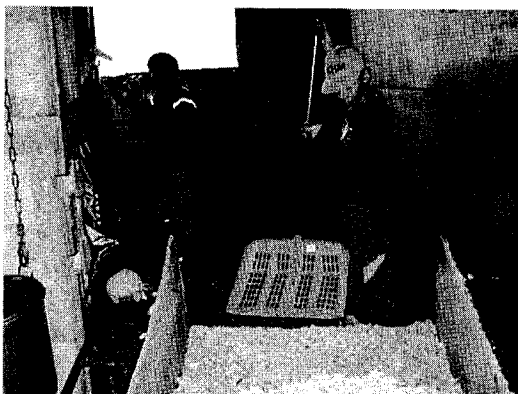
作業の場面

■みんなの力を合わせよう！（生徒全員で行う作業）

時間と人員が必要なチップ換えは、作業内容を2～3人のグループに分担して行います。



- 馬房の汚れたチップを一輪車に移すグループ
- ボロ山までの往復をするグループ
- 新しいチップを一輪車に入れるグループ
- 馬房まで新しいチップを運ぶグループ



■やってみたい作業をしよう！（個別に行う作業）

個人で取り組みたい活動を選択する。主な指導はインストラクターが行います。

- ボロ取り
- 通路を掃く
- 水足し
- 餌付け
- タオルで馬の顔を拭く
- 裏掘をする
- 蹄油を塗る

見る場面

■横からの姿から始める

生徒達がイメージする馬は、本やテレビで見る横か



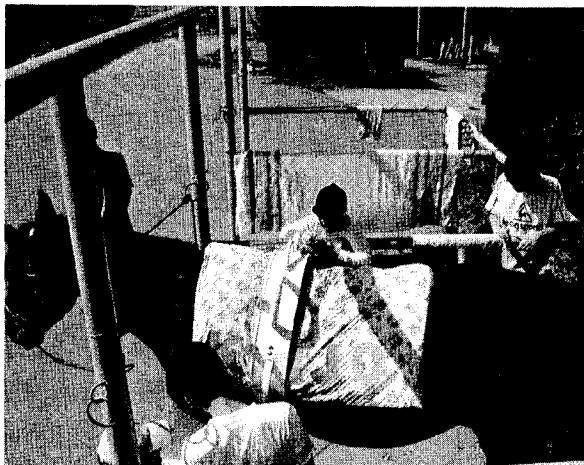
らの全身像が多いようです。初めて馬を見る生徒には、このイメージに近い方法で存在を知らせます。生徒の

中には、すぐに馬を触ることができる者もいれば、施設内を確認してから馬を見に行く者など、馬に近づく順序はそれぞれ異なるので、生徒自身が決めた順序に寄り添いながら活動の提案をします。

触れる場面

■安心して触ることができる場面設定

ゲート内の馬を曳き手により固定し、静止している様子を知らせて「さわりたい」という気持ちが実現で



きるよう設定します。このような場面は、①車椅子を利用する生徒が近づきやすい②生徒が不用意に、馬の死角から近寄れないというメリットがあります。

ここで注意したいのは、車椅子を使用し、且つ意思の表出が困難な生徒を馬の近くに移動させる場合です。本人が「馬から離れたい」という願いがあるにも関わらず、教師のペースで馬に近づいた場合、恐怖心だけを植えつけてしまう可能性があります。ある程度の距離を保ちながら眺めるとか、馬と生徒の間に教師が立つなど、不安感を与えないよう慎重に真意を測りながら進めましょう。

乗馬

■1人の生徒が乗る機会を何回かに分けて提供します。

馬に乗る場面における物理的・心理的な配慮



物理的な配慮

■乗り降りしやすい環境づくり

乗下馬には、底部がしっかりした安定感のある踏み台を使用し、騎乗の際に不安を与えないように配慮します。本校では、乗馬しようとした自閉症の生徒が、台上から転落しそうになり、後の活動に大きな影響を与える事例がありました。また、自力での騎乗が難しい生徒の場合、教師が抱きかかえて踏み台を登らなくてはならないので、面積が広く安定した踏み台であることが望ましいと思います。本校では、ビール工場で使用しているコンテナ（3m²）を階段状にしたものを使用し、生徒を抱きかかえた状態でも昇降しやすいよう配慮しています。



5 教育活動としての馬の活用

—事例—

心理的な配慮

■自分自身で乗ることが大切

各自が自分のペースで馬との距離をとりながら関わっています。



しかし、教師側が活動を与えたり主導したりして「怖くないから」と強制的に馬に乗せてしまうと、結果的には「馬に乗った」という事実は残るが、それは「自分から乗った」のではなく「乗せられた」のであり、その内容は大きく異なってきます。

■乗ることが不安になると思われる例

- 体調がすぐれない。
- 踏み台から転落しかけた経験がある。
- 乗り方がわからない。
- 複数の者からの声かけがある
- 無理やり乗せる。
- 騎乗者の手を、馬の反対側から引く。
- 馬が完全に静止していない。
- 決心が固まらない

■興味や関心がわき、新しい意欲を育む活動例

- 先生や友達が乗っている姿を見る。
- 先生を乗せて曳き馬をする。
- 友達を乗せて曳き馬をする。
- 獣医さんに馬の心拍を聞かせてもらう。
- 馬の餌を食べてみる。
- 人参を食べてみる。
- 自分の乗っている姿を鏡で見る。
- いろいろな乗り方に挑戦する。
- 首の下をくぐる。
- インストラクターの模範馬術を見る。
- ジムカーナで先生と競争する。(タイムを競う)



活動の評価

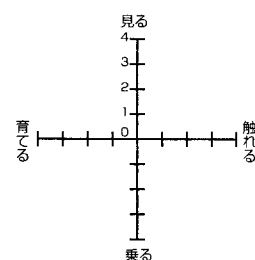


■活動の中で見られた主体性(意欲)に評価点を設けて客観的に評価します

KHscale (Kinjo yogo horse Therapy Scale)

4つの項目に分類した活動で見られた意欲の変動を、各項目の評価点で評価する。各項目の評価点は、数が大きいほど意欲・活動の高まりを示す。

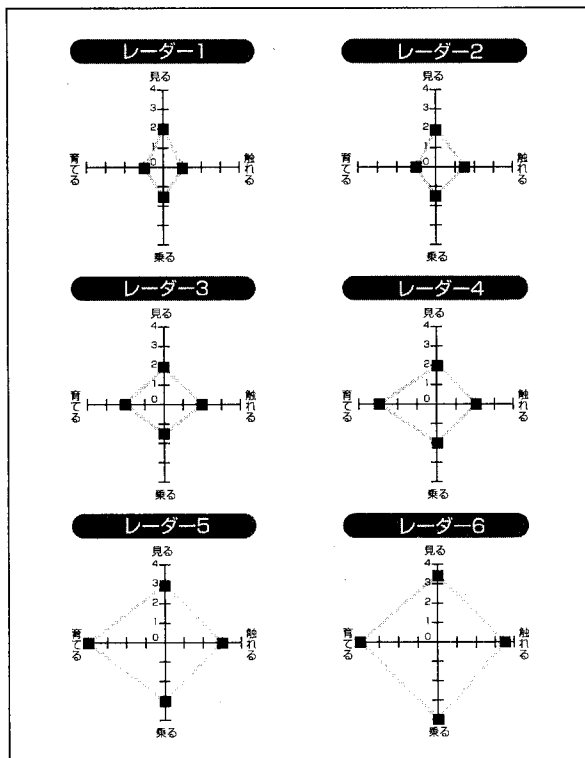
(資料3参照)



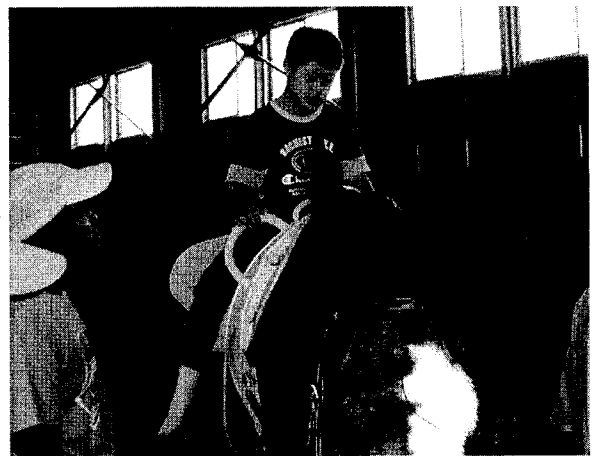
障害別の事例と、KHscaleの分布の特徴

■ダウン症の生徒

馬に対して無理な関わりを持たせようとしなければ、親しみをもちながら自分のペースで乗馬を楽しむことができます。厩舎内のさまざまな作業に関心を示し、周囲の人々と関わりを深めることができます。乗

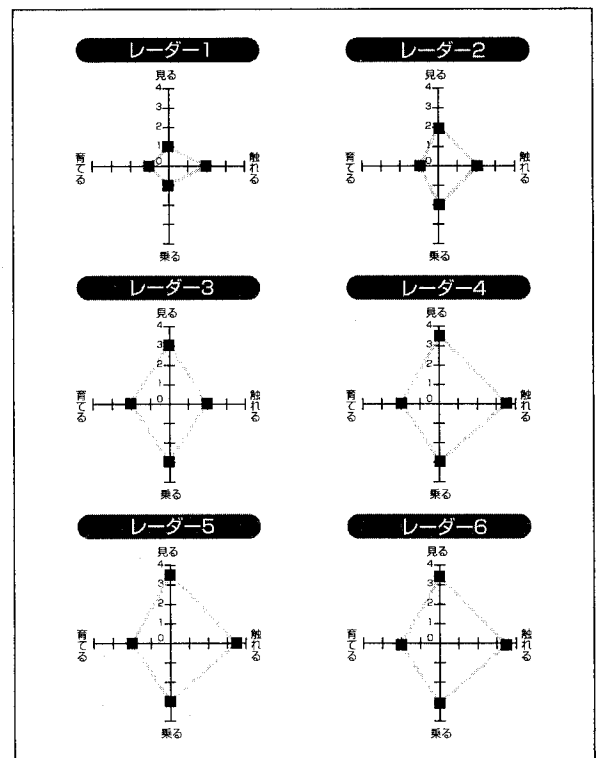


馬を行う場合には、環軸椎の異常や不安定の有無を確認してから始めます。KHscaleによる評価では、活動当初は低い値を示すが、活動が進むにつれ項目ごとの評価は均等に拡大しました。



■自閉症の生徒

馬の1回の失敗が、後の活動に影響を与えることがあるので、成功体験を重ねながら活動をすすめたいも



5 教育活動としての馬の活用

—事例—



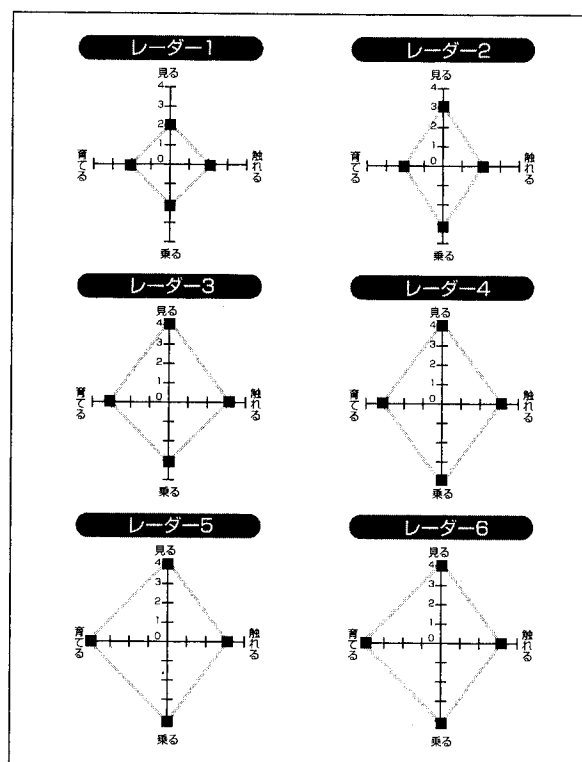
のです。インストラクターとの関係が築かれた時点から、乗馬ができるようになったり、「馬に乗りたい」「発進させたい」という意欲を身振りサインで伝えたりする姿が見られました。KHscaleによる評価では「育てる」以外の3項目での変容がありました。

■躁うつのある生徒

躁うつ症状が顕著で、イヌやネコに対し脚で蹴るなどの行為がある生徒が、6回の活動終了後の変化と



して、気分の波の変化する周期が長くなり、ある程度の気持ちのコントロールができるようになりました。気分の波が低いときの行動の抑止も軽減され、動物に対しても以前のような攻撃

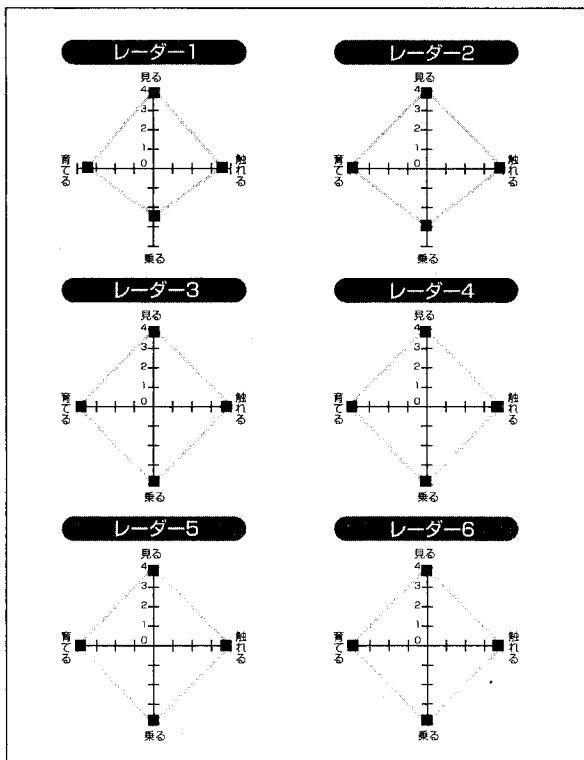
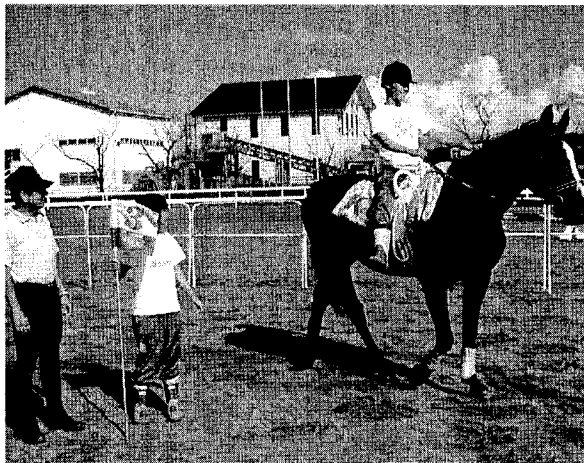


性が見られなくなりました。KHscaleの評価では、どの活動内容にも関心を示し、自ら取り組み始める様子がみられました。保護意識を含む「育てる」の項目では、活動を進めるにつれ高い値への移行を示しました。

■軽度知的障害の生徒

大半の生徒が、意欲と不安を持ち合わせて活動に参加するので、主体性を大切にしながら関わりたいものです。大体の活動内容が分かれば、自ら課題をみつけて積極的に取り組む姿が見られます。インストラクターや、さまざまな人たちとの関わりは、対人関係のマナーやルールを知る体験にもなります。乗馬や厩舎作業、飼養活動では、動物も生き物で感情があることを知ることから、動物に対する攻撃性や恐怖心が軽減さ

れました。KHscaleによる評価では、初回から高い値を示し、年度が改まった活動でも、高い評価点から取り組むことができます。



■脳性マヒがある生徒

緊張が強く側彎が顕著な場合は、教師が抱きかかえる姿勢で騎乗することができます。騎乗後は排痰・排便が促されるという即効性が見られました。緊張の保持が難しい生徒の場合、体幹を保持する体験を目的として後ろ向きや、巻き乗りを中心に組み込んだ結果、自ら体勢を立て直そうとする動きが徐々に見られるようになりました。



資料1

●乗馬をする生徒●

- 自分が乗る馬の名前を、受付へ確認に行く。
- ブーツやヘルメットを借りる。
- 静かに厩舎に入る。
- 馬房から馬を出す。
- 馬装をする。
(ブラッシング・鞍を乗せる・ろくをつける)
- 馬場まで曳き馬する。
- 心身の準備のため外周を曳き馬する。
(してもらう)
- 乗馬をする。発進の合図をして出発する。
(馬上体操、基本馬術、ジムカーナ)
- 自分の乗馬している姿を鏡で見る。
- 活動の終わりに心身を鎮静させるため外周を曳き馬する。
(してもらう)
- 降りたら、首筋を撫でるなど、馬にお礼をする。
- 友達が乗っている姿を静かに見る

資料2

●乗馬以外の活動をする生徒●

- 付近を散策する。
- クラブハウスで馬のビデオや本を見る。
- 放牧、練習をしている馬をながめる
- 友達が作業している様子を見る。
- 先生が馬に触れる様子を見る。
- 触れる、撫でる、ブラッシングをする。
- 人参を飼馬桶に入れる。
- ボロ取りをする
- 水足しをする。
- 通路のホウキがけをする。
- 餌付けをする。
- 乗馬班の様子を見学する。
- 厩舎で自分ができそうな仕事を先生と一緒に
行う。
- 獣医さんが往診に来ている場合は、馬につい
ての質問をしてもよい。
- 装蹄をしている様子を見る。

資料3

●評価の観点●

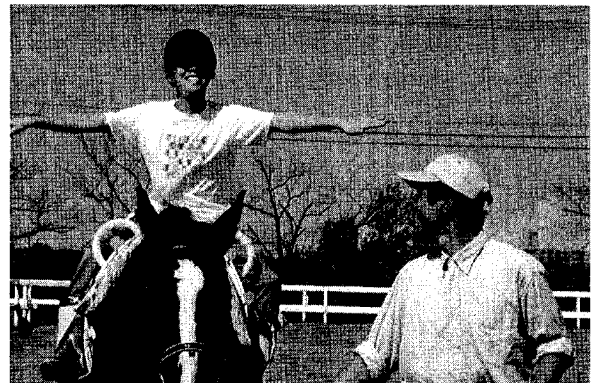
KHscaleの評価項目

見る (見ようとする様子を評価)

- ポイント1.見ようとしな(拒否)
- 2.働きかければ見る (他者からの促し)
 - 3.馬の動きを追う、見ようとする (自主的)
 - 4.友達が乗っている様子や、馬を積極的に見る (積極的)

触れる (馬に近づこうとする様子や、触れるまでを評価)

- ポイント1.厩舎や馬に近付こうとしな(拒否)
- 2.教師やインストラクターと一緒に厩舎に入る。馬に近付く。馬体の一部に触れる。(他者からの促し)
 - 3.自ら人参やリンゴを与える。顔や首筋を撫でる (自主的)



- 4.丁寧にブラシをかける。馬体への接触を恐れない (積極的)

乗る (騎乗の様子を評価)

- ポイント1.乗ろうとしな(拒否)
- 2.乗ろうとする意欲が見られ、促されれば乗る (他者からの促し)
 - 3.自ら乗る。乗馬を楽しむ。もっと乗りたいとせがむ (自主的)
 - 4.馬術を向上しようとする意欲が見られる (積極的)

育てる (他者との協力、保護意識、交流・勤労意欲)

- ポイント1.厩舎作業に関心を示さない、拒否する (拒否)
- 2.促されれば教師やインストラクターと作業に取り組む (他者からの促し)
 - 3.作業内容に関心をもち、馬や友達を思いやる気持ちが表れる (自主的)
 - 4.馬に愛情を持ち、友達と協力しながら積極的に作業を行う (積極的)

(鈴木草郎)

■地域活動として行っている活動例

福島県立大笹生養護学校の事例

「子どもの居場所づくり推進事業」で行っている乗馬体験

1.はじめに

大笹生養護学校は、昭和54年に設置された県立の知的障害養護学校です。本校は、福島市の北部に位置し、周辺は桃や梨、サクランボ、リンゴ等、様々な果物畑があり、春から初夏にかけて辺り一面がピンクや白の花々におおわれます。また、近くにはまな板に似ていることから姐板山と命名された山や十六沼公園、神社等があり、美しい自然に囲まれております。

本校は現在、141名の児童生徒が在籍しております。障害の重度・重複化、多様化に伴い、肢体不自由や自閉症、統合失調症等の精神障害を併せ有する知的障害児が増え、総合養護学校化の傾向にあります。

2.子どもの居場所づくりについて

■「子どもの居場所づくり推進事業」とは

2004年、文部科学省が全国90カ所、各県に委託し、3カ年計画で実施。

- 対象は地域の子ども（小・中学生）。
- 放課後や土曜、日曜、祝日や夏休みなどの長期休業日に開催。
- 学校や公民館、商店街の空きスペースなどの人が集まりやすく、安全・安心なところを活動拠点として行う。
- 心豊かでたくましい子どもを社会全体で育てていくために行う。

- 地域の特性を活かし、地域の大人たちの協力・応援によって様々な体験活動を行う。

■大笹生クラブ誕生2004年8月

会員は本校の小・中学部児童生徒28名。本校教員や地元の大学生のボランティアによって、主に土曜日・日曜日に行い、活動を計画するにあたって次の点に留意しました。

- 学校生活や家庭であまり経験したことのない活動
- 児童生徒の興味関心のある活動
- 地域の特性を生かした活動
- 親子、家族で楽しめる活動

段ボール遊び、水遊び、雪遊び、梨狩り等、午前中2時間程度の活動を計画しました。

その中の活動の一つとして乗馬体験を10月に2日間計画しました。

3.乗馬体験の取り組みのようす

■日程

8:30~	準備
9:00~12:00	乗馬体験 休憩・昼食
13:00~15:00	乗馬体験
15:00~16:00	ミーティング

希望者の半数は、自閉症（自閉的傾向）です。脳性まひや両下肢移動機能障害等、車いす利用者も多いことから体験場所は、安心して体験できるように、本校

の校庭で行うことにしました。日程は左記のとおりです。

子どもの実態からできるだけ待たずに静かな環境の中で体験できるよう、3名のグループを編成し、体験時間を指定しました。

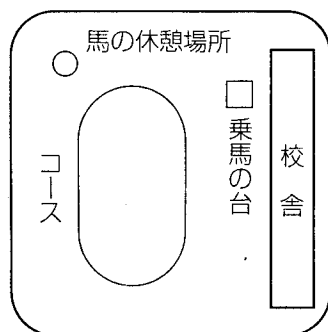
1 グループの体験時間は50分、一人当たり平均16分～20分程度です。

馬は、体験する子どもの体格に合わせ、大型の馬1頭とポニーが2頭の計、3頭です。騎乗するにあたり、スタッフと子どもがあいさつ、自己紹介をした後に、馬に近づく、声をかける⇒馬に触れる⇒騎乗する⇒お礼のあいさつをするというステップで行いました。手綱を引いたり馬と一緒に歩いたりもします。保護者には、予め、乗馬体験に参加するに当たって健康チェック表（巻末資料）と参観の心構えの資料を配付し、協力をいただくようにしました。特に次のことをことをお願いしました。

- ①無理に子どもを馬に乗せようとしたり誘ったりしない。子どもの気持ちを大切にす。
- ②スタッフに任せ、活動の様子を見守る。

なかなか馬に近づくことができなったり、乗ってみたい気持ちはあるが、不安を感じたりしている子どもには、お母さんや兄弟たちに騎乗してもらい、その姿を子どもに見せたり感じたりしたを伝え、緊張感や不安を軽減させたり、体験を共有できるようにしました。

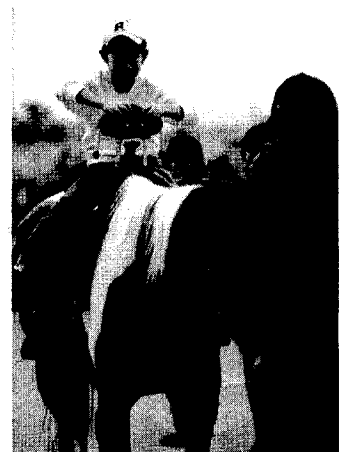
活動場所（校庭）



7月にも馬に乗ったAくん

自閉症児のAくんは、7月に体験し、2回目です。前回、多くの子どもたちが馬に慣れるまで時間がかかり、乗ることができなかった子どももいましたが、Aくんは比較的慣れるのがはやく、馬に乗ることができました。

Aくんは、車から降りるとまっすぐに馬のところに行き、スタッフに「こんにちは」とあいさつをし、自分から馬のそばに行きました。前は少ししか馬に触れることができませんでしたが、今回は馬のお腹やたてがみなどを確かめるようにな



▲大きな馬を体験したAくん

でいていました。馬にあいさつをし、騎乗すると満面の笑みを浮かべ、ハンドルをしっかりと持って身体のバランスをとりながら安全に騎乗することができました。その後、大型の馬にも騎乗し、リラックスして十分に楽しむことができました。

保護者の声

7月に体験させていただきましたが、経験しているせいか、不安がる様子もなく早く乗りたいという気持ちが強かったと思います。何度も乗せていただき、本人は大満足でした。嬉しい時、楽しい時にピョンピョンと飛び跳ねますが、この時も、何度も飛び跳ねていました。乗馬をとおして、普段気づかない子どもの姿を知ることができ、また体験させたいです。

初めて馬に乗れたBさん

自閉症児のBさんは、7月の時は、しばらくは遠くから見ていました。しばらくしてから母親の誘いに応じ、馬に近づくことができ、馬のしっぽや背中に触れることができるようになりましたが、騎乗までには至りませんでした。



▲馬に近づいてみている場面



▲初めて馬に乗った場面

今回は、母親が前回の乗馬体験の写真を見せ、予告してから参加しました。車から降りるとまっすぐに馬のところに行ったBさんは、しばらく、馬の様子を見ていました。スタッフが誘うと馬に近づき、背中やしっぽをなでる等、前回のような緊張感はありませんでした。

馬にあいさつをし、スタッフの支援を得ながら2頭の馬に乗りました。Bさんは、自然に背筋が伸び、身体のバランスをとりながら、十分に楽しむことができました。

保護者の声

今回は、2頭の馬に乗れたこと、人数も少なかったことが彼女にとって良かったと思います。どうなるかと思いましたが、自分から積極的に乗ることができたので嬉しく思いました。途中、笑顔をみせてくれ、本当に良かったです。家に帰ってから、馬に乗ったことを思い出して「出発進行！」のポーズや「バイバイ」をして遊び、とても上機嫌でした。

重度の肢体不自由を伴うCくん

急性脳症後遺症による重度のCくんは、日常生活全般にわたり、介助を要し、普段は車いすで座位保持ができません。時々、横になり、体を休めながら学校生

活を送っています。摂食の機能障害もあり、きめ細かな取り組みをしています。乗馬体験は今回で2回目です。



スタッフが「Cくん、これから馬に乗りたいと思いますが、よろしいでしょうか。」と、騎乗を予告し、了解をとってから馬に乗せました。スタッフのCくんを支えている腕の力は徐々に軽減され、Cくん自身も馬の動きに合わせて、背中が伸び、うつむき加減の顔が前方を見るようになり、表情もキリッとして時折、声を発することもありました。

保護者の声

馬に乗っているときの表情はとても生き生きとして、声を発し喜びを表現してくれ、感動しました。スタッフの方々が子どもを温かく迎え入れてくれとても感動しました。家で乗馬の時の話をしながら写真を見ていると、本人もじっと聞き耳を立てながら写真を見入っていました。今後も回数を重ね、子どもがどう変化するのをもっと知りたいと思いました。

上述の3名は、7月にも乗馬体験をしていることから、雰囲気や何をするのか、馬はどんな動物かなど知っていたため、見通しがもて、スムーズに体験できました。しかし、今回の乗馬体験が初めての児童の多くは、Bさんが初めて体験した時と同じように、写真やテレビでは見たことはあっても間近で本物の馬を見るのは初めてであったため、しばらくは緊張と不安で一杯であったようです。特に小学校1年生の自閉症のEくんは、普段でも新しい環境への適応が難しく、今回の乗馬体験も馬に触れるまでに半日の時間を要しました。Eくんのお母さんは乗馬体験参加のために、予め本人に学校と馬の写真を見せて「学校に行ってお馬さん乗るよ」と知らせました。車から降りたものの初

体験の緊張と不安から、安心できる場所を求め、しばらく自分の教室で過ごしましたが、ようやく状況に慣れ、スタッフの方々の決して無理強いをしない対応と子どもの思いを汲み取るていねいなかわりが「馬にさわってみようかなあ」という気持ちを起こさせ、馬に触れることができたのではないかと思います。月曜日の朝、担任に「おうまさん、うしさんじゃない」と言っていたとのこと。Eくんの心の葛藤は周囲の人たちにも痛いほど伝わってきました。

2回目の体験にもかかわらず、馬に乗るまでに至らなかった生徒もいました。お母さんは2回目だから、乗れるのではないかと期待を持って、参加させましたが、本人は乗るといふ気持ちには至りませんでした。しかし、馬のそばに寄っていくことができ、体にもわずかな時間でしたが触れることができました。はじめは「馬に乗る」ことを目的にしていたお母さんでしたが、スタッフと子どもとのやりとりを見ている中で、少しずつ見方が変わり、馬に触れることができたという一歩前進した我が子の姿に満足することができました。

乗馬体験に参加した居場所づくりのボランティアの大学生から次のような意見や感想をいただきましたので紹介します。

- 子どもが馬に触れたり、乗ったりして馬と触れ合ううちに子どもの表情が明るくなり、笑顔で楽しんでいる様子がとても印象的でした。一人一人のペースに合わせて馬とのふれあいを進めていくことが分かり、必ずしも乗馬しななければならないというのではなくて、馬に近づいたり触れたりするだけでも子どもにとっては、すばらしい体験だと思いました。
- 子どもの気持ちを配慮したかわりがなされ、とても勉強になりました。馬、指導者、子どもの中での心のキャッチボールが大切だと思いました。また、指導者と親との関係づくりも大切だと思いました。

- はじめは恐がり、おびえていた子どもが乗ることができた時の嬉しそうな表情、自信に満ちた顔を見て、こちらまで嬉しくなりました。子どもたちの勇気、自信、こうした経験が子どもたちの成長につながっていくことを実感しました。

4.おわりに



障害のある子どもたちにとって、乗馬は、身体機能に寄与する側面と心理的な健康が教育に寄与する側面、そしてスポーツを楽しむという要素が含まれています。今回の乗馬体験に参加した子どもたちには、それぞれの効果が顕著に表れていました。

■身体的機能への寄与

- 背すじが伸びた。●体幹維持ができた等

■心理・教育的な寄与

- 乗馬体験をイメージして会場まで来ることができた。
- 馬に対する親近感が持て、無言の中で馬との対話がなされ、自己決定ができた。
- また乗りたい、楽しかった等というコミュニケーションが家族の中で生まれ、家族で共有することができた等

■スポーツとして

- 体を動かして楽しかった。
 - 嬉しい、楽しい表情がたくさん見られた等
- 子どものみならず、保護者やボランティアにとっても思い出深い2日間となりました。障害のある子どもたちの乗馬や馬とのふれあいは、県内でも各種団体から注目されております。本校では、今後も関係者の協力を得ながら、少しでも多くの子どもたちに体験させていきたいと考えています。

(円谷美智子)

長野県伊那養護学校の事例

保護者が中心となって行っている休日活動としての乗馬

保護者が毎土曜日に乗馬会を開き学校職員が介助に入ります



本校は長野県の南部に位置する児童・生徒数130名の知的障害養護学校です。保護者会の活動が活発で、何人かの保護者同士が集まって活動しやすい規模のグループをいくつか作り、休日活動を充実させています。スイミング・各種学習会・訓練会、そういった活動の中の一つに「乗馬活動」があります。

学校から車で5分ほどの場所に、ポニーや木曽馬など背丈が低く子どもたちが乗りやすい馬のいる牧場（伊那ライディングパーク）があります。そこで土曜日ごとに乗馬活動が行われ、学校の職員が何人かボランティアとして介助に入っています。

「第1土曜日の会」のグループの乗馬の様子を紹介します

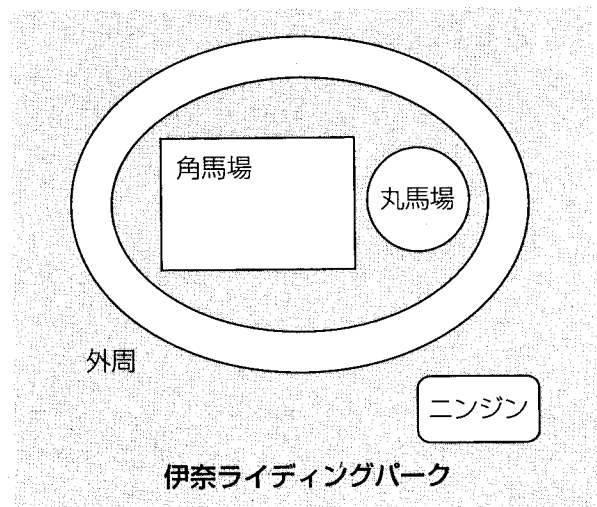


毎月第一土曜日には、伊那養護学校の小学部から高等部までのみなさんが3～6人、馬に乗りに来ます。（第4土曜日には、卒業生も継続して乗りに来ているグループの活動があります。）

知的障害・自閉症・脳性まひ・二分脊椎など、人によって障害は違いますが、みんな自分にあった乗り方を楽しんでいます。

馬とふれあいます

自分の番まで馬にニンジンあげたり、なでたりして過ごします。



一人20分を目処に馬場を選んで馬に乗ります

■外周から角馬場へ

- 外周（200m）をゆっくり1～2周まわりながら、身体や心をほぐし角馬場へ移動します。

■角馬場で

- 巻乗りやハの字乗りをして、馬の動きに身体の動きをあわせます。

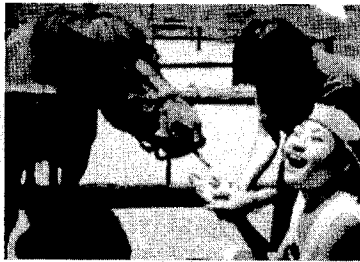
■外周から丸馬場へ

- 外周を終えると丸馬場で手綱を持って馬に乗る人もいます。

外周と角馬場で乗馬するみなさんの様子です

あいさつ

自分の番までエンジンをおいて待ちます。



動きだし

自分でサインを出して馬に動いてもらいます。



角馬場巻乗り

力が抜けたところで、角馬場で8の字や小回りに乗ります。



最後に1周

乗馬の最後にゆっくり1周。終わりにするか聞いて、まだといったらもう1周します。



横乗り

乗馬のはじめに横乗りをして首の立ち上げ運動をすることもあります。



外周を2周

ゆっくり外周を2周します。はじめは固かった身体が馬のリズムにあわせて上下しだします。



自分で

乗っているうちに馬の背から身体がずれてきます。なるべく自分で身体を戻します。

5 教育活動としての馬の活用

—事例—

丸馬場で乗馬するみなさんの様子です

出会い・あいさつ

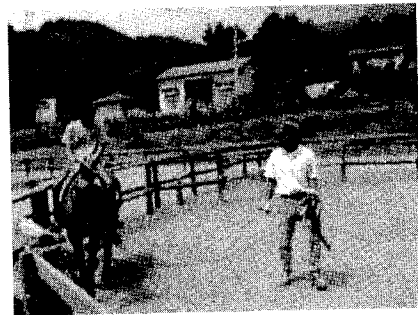
馬にニンジンをおもてなししたりして自分の番を待ちます。

お金を払って帰ります



ありがとう！

丸馬場で



丸馬場で手綱を持てるようになりました。

- 支援費を使って、移動介護を受け交通機関を使って来る人もいます。
- 乗馬のお金を、自分のお財布から支払って帰ります。
- 社会と向き合う時間です。

休日の乗馬活動を通して聞かれた感想です

- 姿勢が良くなってきたね。カッコいい。顔があがるようになってきたね。
- はじめは、支えていると体重をすくかけてきて、手がかれたんだけど、外周するうちに自分で身体を支えるようになるね。すごい。
- やっぱり乗ったあとは、股関節が柔らかくなってますね。馬じゃないとできないことですね。
- 一人で馬の上に乗ってる!! うれしい。

- 馬が止まってしまう……「行って、行って」としきりにサインを出すTさん。
- (支援費を使い家の送り迎えで来なくなったH君の乗る姿を久しぶりに見たお姉さんが)「あんなに上手に乗ってるって知らなかったです」
- 「終わりにしますか」……返事をしない「もう1周しますか?」……体を震わせるMさん
- うま、うま、のりた、のりた。
- はじめは怖がっていたN君が「また来たいですか?」「あー」と声を出して応えます。

この貴重な環境を是非 学校の教育課程にも



保護者会が中心になって位置付けているこの馬の活動を、学校の教育課程に取り入れていくことができたらと強く思います。下記の条件を満たしているこの地域では、家庭や地域と深く連携した「馬を用いた授業」が展開できそうな気がします。

馬に乗ることが教育的に 生きてくるときの条件

■良く調教された馬がいること

- 木曾馬がいます。たいへんゆっくり歩き、わがまを言わずに乗せてくれます。
- 木曾馬は、サラブレッドに比べ体高が低く歩幅が狭いため、馬の背で感じるゆれが少なく乗りやすい馬です。
- 介助するのも、子どもを乗せやすく支えやすい馬です。

■馬のことをよく知っている専門家がいること

- インストラクターの須藤さんのひく馬は、ゆっくりで子どもたちも馬のゆれに身体をあわせやすい様子です。障害者乗馬の勉強もされています。
- オーナーの井地さんも子どもたちの乗馬にたいへん協力して下さいます。軽乗鞍（けいじょうあん）もそろえていただいています。

■子どものことをよく知っている教員がいること

- 引き馬1人、子どもの両サイドに1人ずつ、計3人で支援にあたる必要があります。両サイドで支えるのは、子どもの身体の動きや表情の変化をよめる教員があたるのがよいと思います。

■馬場の環境が整っていること

- 学校から車で5分間の位置に馬場があります。
- 外周・角馬場・丸馬場とそれぞれの目的にあわせて馬場を使い分けることができます。



この馬の会の介助に入って3年が経ちました。



（伊藤尚志）

5 教育活動としての馬の活用

—事例—

■ 研究所で実施している活動例

乗馬はチャレンジタイム

乗馬はただ馬に乗るだけでなく、馬のお世話をすることも含まれます。スマイルの会（横浜市のダウン症の活動グループ4名）のメンバーは国立特殊教育総合研究所の馬を用いた教育に関する研究活動に協力してきました。その活動を簡単に紹介しながら、馬の持っている魅力を皆さんと共有したいと思います。

僕はケンです。
馬は少し苦手。
乗ってみたいけどなー。



僕ジュンです。
僕も少し馬は苦手だけど、
乗るも前の挨拶はちゃんと
できますよー。

馬の専門の方が枠の
外から引き綱を
させてくれました。



私セイコです。
一度乗ったので馬に身体を
委ねることもできます。



引き綱に引かれて
丸馬場に思わず入って
しまいました。



みんなと一緒に
両手を挙げることも
できました。

初めて馬に
乗せてもらいました。



馬の上に立つことにも
チャレンジしました。



どうだ！すごいだろー。
もう 最高よー。



僕はダイゴです。
馬上で手を挙げることも
二人一緒ならで安心して
できます。



私は専門の方と一緒に
馬の前足の泥を落とすことに
チャレンジしました。

馬に乗るだけでなく、
馬にブラッシングする
ことも大切な
活動です。



スマイルの会の4人は、お父さん、お母さん、お姉さん、お兄さんと一緒に家族ぐるみで研究に協力してくれました。馬は少し苦手なケンちゃん和ジュンちゃんでしたが、馬の専門家の方の細やかな配慮で馬と共に活動できるようになりました。ダイちゃんは馬が大好きで小型の馬より大型の馬（シャイアン）に乗りた

がりました。セイコちゃんは回を重ねる毎にいろいろな技を習得しました。馬は子ども達のチャレンジする気持ちを引き出し、それを受け入れてくれる大きな大きな存在となりました。

（當島茂登）